



「意識の流れ」からのスタート！

この本『Taïke Tomekichi』の編集
中、鹿児島読者の方から『意識の流れ』
を図書館で見つけたと、その読まれた
感想が弊社へ送られてきました。

少し長くなりますが、この方が『意
識の流れ』と出会われた衝撃を、ま
ずは紹介させていただきます。

送られてきた読者からの感想

この日は忘れもしない……。

私は、もう56歳になっていた。

年が明けて夫の休みがようやく取れた
ので毎年行っている近所の神社へ初詣に
出かけた。その頃には、横着にも自分な
りの持論というか哲学のようなものができ
ていて、今思うと、自分で自分の精神状
態を保とう、守ろうとしていたのではない
かと思っている。

お賽銭さいせんを入れ柏手かしわでを打つ。頭を下げる。
何も願いごとはしない。

「世界が平和だったらいい……」、そんな

ことをチラッと思うくらい。

夫は毎年購入している交通安全のお守り
を買おうと色とりどりに並んだお守り売
り場の前へ進む。

私は「いらないんじゃない!？」

すると、たまたまなのか、その夫の気
に入っているスタイリッシュなお守りがな
かった。

「ほらね! だから、もういいんじゃない
!？」と言うと、主人は「ん……ん……まあ
ね!」と半分、残念そうに言った。

駐車場へ戻り、車に乗り込んで、前年
度に借りていた図書を返却するため図書
館へ向かう。

車を運転しながら、私が「何かさ、な

くてよかったんじゃない? だってお守り
があるからって事故しないわけではないし
……実際、大破した車の窓ガラスにはお
守りがぶら下がっていたり、後ろにステッ
カー貼ってあったりじゃん!! そんなの願
いしたりするほうがおかしくないっけ~!」
と言うと、夫も「言ってることは確かにそ
うだと思う。自分も、あんまり、そこまでは
思っとらんたいね」と……11歳年下の夫
は、半分納得させられたのか(笑) そんな
話をしながら図書館に着いた。

「今日は返却するだけだから、すぐ返っ
てくるから車の中に居ていいよ!」と声を
かける。夫は「わかった」と、スマートフォ
ンを手に取った。